

# ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.90/91

September 2013

## ロシア史研究会 2013年度大会特集号

・明治大学 駿河台キャンパス



(明治大学駿河台キャンパス 明治大学 HP より転載)

すでにお知らせしたように、ロシア史研究会 2013 年度の大会は、10 月 12 日(土)、13 日(日)の両日に明治大学で開催されます。多くの会員の積極的なご参加をお待ちしております。なお、大会にかんする事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局 ([BZP10472\(at\)nifty.ne.jp](mailto:BZP10472@nifty.ne.jp)) 宛にお送りください。

### 【アクセス】

#### □会場

明治大学駿河台キャンパス

リパティータワー10階LT1103/LT1106

#### 【住所】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

#### 【最寄駅からのアクセス】

■JR中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線/御茶ノ水駅 下車徒歩3分

■東京メトロ千代田線/新御茶ノ水駅 下車徒歩5分

■都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線/神保町駅 下車徒歩5分

[http://www.meiji.ac.jp/koho/campus\\_guide/suruga/access.html](http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/access.html)

[http://www.meiji.ac.jp/koho/campus\\_guide/suruga/campus.html](http://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/campus.html)



## 大会プログラム

10月12日(土)

	A会場 (LT1103)	B会場 (LT1106)
10:00-10:55	中嶋毅「カスペ事件をめぐる在哈ロシア人社会と日本 1933-1937」 コメンテーター：高尾千津子	ピョートル・ポダルコ「«Забытый герой». Генерал Н.Н.Муравьев и русская дипломатия XIX века.» コメンテーター：ヤロスラフ・シュラトフ
11:00-11:55	麻田雅文「キッシンジャー史観を越えて—米ソ関係から読み解く中ソ国境紛争、1969年—」 コメンテーター：寺山 恭輔	ジェーン・バーバンク「Supervising the supervisors: The zemskie nachal'niki of Kazan province at the start of the 20 <sup>th</sup> century」 コメンテーター：長縄宣博
12:00-13:30	昼食	
13:30-16:30	共通論題(1) (LT1103)「非ロシア人地域から見たソ連」趣旨説明：豊川浩一、報告：半谷史郎・吉村貴之・須田将、コメンテーター：塩川伸明、野田岳人	
16:35-17:50	総会	
18:00-20:00	懇親会 (リバティータワー23階)	

10月13日(日)

10:00-12:00	パネル (LT1103)「ソヴィエト的公衆・公論・公共性—общественность 概念をてがかりに」趣旨説明：松井康浩、報告：浅岡善治・中地美枝・アレクセイ・ユルチャク、コメンテーター：河本和子
12:00-13:30	昼食
13:30-16:30	共通論題(2) (LT1103)「歴史のなかのロマノフ朝再考」趣旨説明：豊川浩一、報告：土肥恒之・竹中浩・巽由樹子、コメンテーター：池田嘉郎・池本今日子

\*また、懇親会の参加費は、A 会員が 6,000 円、B 会員が 4,000 円の予定です。

\*ペーパーはロシア史研究会ホームページからダウンロードできます。パスワードは1613です。

10月12日(土)

### ●自由論題 (10:00-11:55)

#### ■中嶋毅「カスペ事件をめぐる在哈ロシア人社会と日本 1933-1937」

いまから 80 年前の 1933 年 8 月、ハルビンの著名なユダヤ人富豪ヨシフ・カスペの息子で有望な若手ピアニストであったセミヨン・カスペが誘拐され、身代金 30 万円を要求される事件が発生した。父カスペは身代金支払いを拒み、犯人側との交渉と警察当局の捜査の末、同年 12 月にはロシア・ファシストの犯人グループが逮捕され、セミヨンは遺体となって発見された。今日では知る人も少ないが、当時この事件はハルビンのユダヤ人社会のみならず世界中のユダヤ人コミュニティを震撼させた。それは、犠牲者セミヨンがフランス国籍者であり、同事件が世界的に報じられて一大センセーションを引き起こしたためであった。また当時から事件の背後に日本軍の存在が噂されており、事件の裁判も不可解な結末に終わっていたのである。

在外ロシア史・極東ユダヤ史におけるミステリーの一つであるこの事件は、古くから人々の関心を引きつけてきた。バラクシンの古典的著作『中国における終焉』(1958

年：2013 年再刊) や、ステファンの『ロシアのファシスト』(1978 年) は、大きな紙幅を割いて本事件を紹介している。近年では、フランスの歴史家プロイヤルが、フランス外務省文書館にある在哈フランス領事館報告の中から、カスペ事件を担当したシャンボン副領事の報告書を発見して公表した(2001)。また日本では、読売新聞の記者であった砂村哲也が『ハルビン教会の庭』(2009 年) で事件を取りあげ、貴重な情報を発掘した。

カスペ事件に関して残された史料や情報は必ずしも多くはなく、その内容も十分な史料批判が必要である。また関連情報の多くは従来から利用されているものの、それらを比較検討して事件の意味を総合的に考察した研究はほとんどないといってよい。

本報告は、外務省外交史料館にある本事件関連史料と同時代にハルビンで発行されていたロシア語新聞『暁』および同時代人の回想に依拠しつつ、在ハルビン日本総領事館がこの事件にいかに対処したかを分析することを通じて、カスペ事件についての従来の知見を再検討することを試みる。その際、事件を「ロシア愛国者によるユダヤ人に対する政治的犯罪」とする日本側の評価が定まった 1934 年末を、在哈ロシア人社会と日本当局との関係の転機ととらえる視点を提示したい。

#### ■П.ПОДАЛКО «Забытый герой». Генерал Н.Н.Муравьев и русская дипломатия XIX века.

История российской дипломатии, как и любой другой, знала периоды взлётов и падений, при этом наибольшие успехи, как локальные, так и глобального масштаба, нередко достигались не профессиональными дипломатами, а лицами, случайно оказавшимися «в нужное время в нужном месте», что отчасти подтверждает мысль мемуариста о российском «умении всегда пользоваться людьми обратно их талантам». Одним из таких неизменно нужных людей, многократно служивших России в самых разных сферах и сделавших немало для повышения её международного престижа, был генерал Н.Н.Муравьев-Карский (1794-1866). Военные заслуги генерала Муравьева достаточно известны его победами на Кавказе в ходе Русско-Персидской (1826-1827 гг.) и двух Русско-Турецкой (1828-1829 гг.) войнах, а также в бытность его наместником на Кавказе в 1854-55 гг. Менее изучены и описаны его дипломатические успехи, достигнутые в ходе экспедиции в Хиву (1819 г.) и во время миссии в Турции, где русский генерал выступил в качестве посредника по урегулированию конфликта между султаном Махмудом II и правителем Египта Мухаммедом Али (1832-1833 гг.), что впоследствии привело к заключению между Россией и Османской империей Ункиар-Искелесского договора (1833). Договор этот позволил России практически мирным путем достигнуть контроля (продолжавшегося 7 лет) над Черноморскими проливами, чего она безуспешно добивалась в ходе многочисленных войн на протяжении почти двух столетий. Использование профессиональных военных в качестве дипломатов было типично для царской России, но выбор редко оказывался столь удачным, как это произошло с Муравьевым. Однако характер генерала, его неумение ладить с императорским двором и родство со многими декабристами не позволили ему достичь звания фельдмаршала и привели к преждевременной отставке, а впоследствии – к почти полному забвению его богатой событиями жизни, оставив в памяти потомков лишь взятие войсками под его началом крепости Карс в 1855 году.

## ■麻田雅文「キッシンジャー史観を越えて—米ソ関係から読み解く中ソ国境紛争、1969年—」

1969年の中ソの国境紛争は、その規模からすれば異例にも、多くの研究が生み出されてきた事象である。もちろんそれには理由がある。この紛争は10年越しの論争を経て、社会主義の二大国がついに軍事衝突に至った事例として、全世界の注目を集めてきた。とは言え、モスクワや北京の公式報道を除けば情報を入手するのが難しかった当時の状況により、その原因や規模については様々な説が現れ、消えていった。近年、ようやくアメリカやイギリスが衝突に関する一次史料を公開し、中国やロシアでも研究環境が整ってきたことで、この衝突の内幕が明らかになってきている。中でも、2010年に中国のコラムニスト劉郴山が『人民日報』での連載『文史参考』に寄せた「苏联曾计划核毁灭中国（ソ連は中国を核で壊滅させようと計画した）」は、紛争中にソ連側が中国への核攻撃を準備していた、というセンセーショナルな内容で、イギリスの新聞テレグラフが報道すると、世界的な反響を巻き起こした。

しかし、2000年代以降の先行研究は、この紛争を必ず米中の外交関係樹立、すなわちニクソン訪中に向けてのスプリングボードとして描いてきた。その大方の見方は、時のニクソン政権が、この事件の結果さらに国際社会で孤立を深めた中国に接近し、外交関係の劇的な樹立を導いたとされる。先行研究では、専らこの点に関心が集中してきた。

忘れられたのは、もう一方の当事者であるソ連とアメリカの関係である。この二カ国は正式な国交を樹立し、冷戦下にありながら緊密で、しかも高いレベルでの外交交渉を、紛争の前後に続けていた。いわゆるデタントである。両国の間で、中ソの国境紛争はどう論じられ、その後の関係にどのような影響を及ぼしたのか。

折しも、2006年にはアメリカの外交史料集（Foreign Relations of the United States）の該当年度が出版されるなど、関連史料の刊行が相次いでいる。本報告は、この他にも報告者がワシントンDCで収集したアメリカ側の一次史料とロシア側の二次文献から、1969年3月から同年末までの緊迫した米ソ関係の展開を描くものである。米中ソのいわゆる東アジアの三角外交において、一次史料の公開が進まないため論証の難しい中ソ関係を明らかにするためにも、米ソ関係が明らかになることで、1969年の国境紛争の全体像はより明確となるだろう。

## ■Jane Burbank “Supervising the supervisors: The zemskie nachal’niki of Kazan province at the start of the 20<sup>th</sup> century”

The much maligned institution of the “zemskii nachal’nik” was created in 1889 to improve governance in rural areas of the empire. The project is conventionally considered a “counter-reform” that put the nobility back into control over Russia’s peasants. Using another frame of reference, we can analyze this imperial official as a critical “intermediary” of Russian governance, an individual entrusted with administrative powers over an assigned area and its inhabitants. In this paper, I look at the zemskie nachal’niki and their functions through the eyes of their official overseers in Kazan province. Periodic inspection by provincial authorities reveals the qualities that were expected of the zemskie nachal’niki as well as their successes and failures in carrying out their duties. In addition, the review process itself exposes structural elements of Russian sovereignty at the beginning of the twentieth century.

My sources for this paper are the records of the Kazan Provincial Board. I focus on a series of inspections carried out in 1909. These reviews, which were based on personal interviews and visits to officials’ offices, describe in explicit

detail the qualities of the individuals concerned and of their performance in office. Each review concludes with assessments and recommendations. Together these inspections offer a group portrait of Kazan's noble intermediaries at work in the countryside twenty years after the creation of their office. My analysis of these sources undercuts the usual image of arbitrariness, neglect, and under-government in rural areas. Provincial overseers paid close attention to knowledge of the law, efficiency and close ties to the population in their reports. These reports also display a shared and unquestioned concept of state service as dependent on the personal qualities of individual officials. They express and reinforce the location of sovereignty in the network of loyal servitors who carry out the state's tasks of providing protection, improving economic productivity, and securing order in the empire.

### ●共通論題（1）：「非ロシア人地域から見たソ連」（13:30～16:30）

趣旨： 前世紀と今世紀の境頃から、多民族国家ソ連研究は著しい進展を遂げている。マーチンの『アフーマティヴ・アクションの帝国』が2001年に刊行されたことが、一つの指標となるだろう（邦訳は半谷史郎監修で2011年に出た）。ソ連の民族政策をアフーマティヴ・アクションと呼ぶことには賛否両論があろう。それでも同書によって、ソ連政治の全時期を通じてエトノスが規定的な役割を果たしていたことが、研究者の共有認識となったことは疑いない。同書のほかにも、スミス『ボリシェヴィキと民族問題』（1999）、スーニー・マーチン編『諸国民の国家』（2001）、ハーシュ『諸国民の帝国』（2005）など、ソヴィエト連邦制について注目すべき本は多い。

日本のロシア史研究は、従来からソヴィエト連邦制やそこにおける「民族の問題」に大きな関心を払ってきた。山内昌之、中井和夫、高橋清治の著書が、先駆的なものとしてすぐに挙げられる。近年では塩川伸明がこの主題に関して精力的に仕事をしている。革命期を中心にした西山克典の著書、それに帝政期に軸足を置いた松里公孝や宇山智彦の議論も、多民族国家ソ連の理解を深めるうえで大きく貢献してきた。

他方、ロシア史研究会大会の共通論題ということで見ると、「ロシア帝国論」が何度も議論を重ねてきたのに対して、多民族国家ソ連については、上述のような世紀交からの進捗を踏まえて議論の機会をもつことはなかったようである。もっとも、自由論題では、新しい世代の会員を中心にして、毎回のように興味深い報告がなされてきた。近年のソ連論の進展を受けとめることを狙いとする今回の共通論題では、そのような新しい世代を含めて報告者・コメンテーターをたて、コーディネーターとして塩川伸明の協力を得た。

「非ロシア人地域から見たソ連」という題目には、議論の余地があるだろう。「非ロシア人地域」という言い方はかなり曖昧であるし、エトノスと地域の密接な結びつき自体、ある程度までソ連になってからの歴史的産物だからである。とはいえ、近年の若手研究者がソ連期をテーマとする場合、「民族共和国」を取り上げる比重が高いことを考えれば、この題目は研究の現状をそれなりに反映しているともいえよう。いずれにせよ、今回の題目設定は、今後も多民族国家ソ連について大会で議論を重ねていくための、きっかけとして捉えてもらいたい。「非ロシア人地域」だけでなく、「ロシア人地域」なるものの歴史的形成やそのソ連内での位置づけも、当日の議論では当然俎上に載せられるであろう。それ以外にも、国境を越えたエトノスのつながり、ソ連内の諸地域・エトノス間の関係、内政・外交と「民族の問題」の関わり、それに他の連邦制や多民族国家との比較など、多民族国家ソ連をめぐる多様な問題が、各報告およびその後の議論の中で取り上げられることになるであろう。

（ロシア史研究会委員会）

## ■趣旨説明：豊川浩一

### ■半谷史郎：「ソ連の民族政策における大祖国戦争の重み：1970年代のソ連ドイツ人の投書を分析する」

この報告では、ポスト・スターリン期のソ連の民族政策を、ドイツ人を事例に考えてみたい。

ロシアのドイツ人は、18世紀半ばのエカテリーナ女帝の召致に由来する移民である。1917年の革命の後、多民族の「国民国家」ソ連を構成する一員として等し並にソ連の民族政策の恩恵に与り、ヴォルガ地方に自治共和国も設置された。だが、30年代の独ソ関係の悪化、さらには41年6月からの独ソ戦（いわゆる大祖国戦争）が、ドイツ人の地位を決定的に貶める。住民の中に「数千数万の破壊分子とスパイ」がいると断罪する決定が41年8月末に出ると、9月に入ってドイツ人全員のシベリア・中央アジアへの強制移住が断行され、自治共和国も廃止された。以後ドイツ人の「国境をまたぐ民族の絆」が常に「外国人」を意識させ、民族政策の恩恵、とりわけその核心である領土自治の対象から一貫して排除される。スターリン批判がなされて強制移住の過ちが認められた後も、自治共和国が再建されることはなかった。内外の情勢に押されて中央当局がドイツ人の自治領設置に動いた時も、そのたびに民族政策の土着性の原理を重くみる住民の反対運動がおきて頓挫している。

報告者はこれまでソ連ドイツ人を主たる事例にソ連の民族政策の研究に取り組み、考察を積み重ねてきた。近年はブレジネフ期に注目し、領土自治と土着性の原理が民族政策の根幹として人びとに広く浸透していたことを確認している。

この報告では、次なる考察として、大祖国戦争に注目する。

1941年から45年まで足かけ五年にわたるこの戦争は、スターリン体制が存亡の危機に立たされたソ連史の転換点である。民族政策においても、ロシア人の中心性が明らかになるなど、大きな変化があった。なかでも今回重視したいのは、ナチス・ドイツに対抗するため強く鼓吹されたソビエト愛国主義である。報告者は、これがソ連の民族政策の根幹として先述の領土自治や土着性の原理に勝るとも劣らぬ役割を果たしていたと考えており、この仮説の成否をドイツ人の事例で確認したい。

考察の材料は、1970年代にソ連ドイツ人がモスクワの民族新聞「ノイエス・レーベン」編集部におくった投書を用いる。投書の概要を伝える報告書が党中央委員会に提出されており、ПГАНИで三種類の報告書を見つけた（74年12月9日付、76年9月20日付、81年2月6日付）。内容は多岐にわたるが、ほかの民族との対比で語った「自分たちには〇〇が欠けている」という不満が目につく。この不満を手がかりに、ソ連の民族政策が具体的にどのような恩恵をもたらす（と信じられていた）のかを明らかにし、大祖国戦争の持つ重みを確かめる。

### ■吉村貴之：「第二次世界大戦後のアルメニア「祖国帰還」運動の再開と展開」

第一次世界大戦からの混乱を経て、旧ロシア帝国のアルメニア地域はアルメニア・ソヴィエト社会主義共和国（以下では「ソヴィエト・アルメニア」と略記）となり、一方で旧オスマン帝国のアルメニア人は近隣諸国に四散した。この在外アルメニア人コミュニティをソヴィエト・アルメニアの影響下に置こうとする試みは、ソヴィエト・アルメニア政府が成立した早い段階の1921年から大テロルで国外との交流が途絶える1937年まで行われており、在外コミュニティ内の親ソ勢力となった旧オスマン帝国のアルメニア人エリートからなる民主自由党やアルメニア慈善協会の協力で、国外のアルメニア人がソヴィエト・アルメニア移住する現象が見られた。

ただ、ソヴィエト・アルメニア政府が第二次世界大戦後の1945年12月より再開した

在外同胞の呼び寄せ政策は、それを上回る大規模なものとなった。ソヴィエト政府の宣伝に呼応して、中東や欧米地域に離散していたアルメニア系住民が 1946 年から 53 年だけで約 10 万人の在外同胞がソヴィエトに「帰国」することになった。しかも、戦間期の移住が、第一次大戦中にオスマン帝国下で発生したアルメニア人虐殺の難民をソヴィエト・アルメニア側が受け入れるという色彩が強かったのに対し、戦後の移住は、在外社会で一応の生活基盤を築いていたアルメニア人が、ソヴィエト政府やその影響下にあるアルメニア教会のプロパガンダを受けて、主体的にソヴィエト・アルメニアへ移住を決断するに至った点が特徴的である。

また、戦後の「帰国」事業に親ソ的な民主自由党やアルメニア慈善協会の協力があったことは言うまでもないが、ソヴィエト・アルメニアから亡命した民族政党ダシュナク党のように、当初はこの事業に好意的態度を示しながら、冷戦構造が確立しつつあった 47 年以降は妨害活動に転じるようになるという反応を引き起こした点も興味深い。まさに戦後の「帰国」事業は、ソヴィエト・アルメニアが全アルメニア人社会の盟主としての影響力を在外社会に及ぼそうとした活動の一つの頂点であった。

今回の発表では、特にこの「帰国」事業の再開が、ソヴィエト内部でどのように企画立案されたのか、どのようにして国外向けに宣伝活動を行い、国外の勢力の協力を再び得たのか、そして「帰国」者たちがどのような処遇を受けたのかに焦点を当てて、このソヴィエト・アルメニアの国家事業が、特にソヴィエト・アルメニアの国民統合にどのような影響を与えたのかについて、アルメニア共和国国立社会政治歴史中央文書館所蔵の政治文書を中心に考察する。

#### ■須田将：「民族文化の生産と抑圧：戦前スターリン期のウズベク・ソヴィエト作家同盟」

本報告は、ウズベク・ソヴィエト作家同盟の事例から、戦前スターリン期ソ連の民族文化の生産と抑圧における党・政府官僚と知識人・作家の相互作用を描く。ソヴィエト作家同盟は、ソ連の各民族地域で文化の生産と抑圧において重要な役割を担った社会団体であり、この公共的な舞台に注目することで、民族文化に関わるソヴィエト権力の産出的・抑圧的な両側面に迫ることを試みる。主に利用する史料は、ウズベキスタン国家文書館所蔵の共和国作家同盟文書である（ЦГА РУЗ Ф.Р-2356）。

まずウズベク・ソヴィエト作家同盟設立までの経緯に触れておくと、20 年代末から 30 年代初めにかけては①ジャディードのチャガタイ談話会に参加した Cholpan や カーディリーら「革命世代」の民族知識人が創作を続けており（多くは 1880-90 年代生まれで、マクタブやマドラサ、ロシア語現地人学校で学んだ）、②サマルカンドに設立されたクズイル・カラムにはアイベクやアリムジャンら「新世代」のウズベク人ソヴィエト作家・批評家が集まっていた（主に 1905-10 年頃の生まれで、ソヴィエト学校で初頭・中等教育を受けた）。この「新世代」は「革命世代」の知識人を階級的観点から批判していたが、芸術的観点からカーディリーの現代的な小説文体や Cholpan の現代詩を高く評価し影響を受けていた。③タシュケントでは工場労働者出身のプロレタリア作家も登場しウズベク・プロレタリア作家協会が設立された（これは短期間の内に左派偏向批判により解体された）。

全連邦的な社会団体の共和国支部として 1932-34 年に組織されたウズベク・ソヴィエト作家同盟は、様々な作家たちに公的な創作と作品討議の場を与えたが、特に「新世代」のウズベク人作家に活躍機会を与え、正統な民族文学・文化の担い創り出す重要な役割を与えた（なお第 1 回大会の代表はヨーロッパ系が約 3 割、ウズベク人その他の在地諸民族は 7 割。1939 年の第 2 回大会でウズベク人は 6 割を占めた）。ウズベク人作家に対しては現代を題材にした社会主義リアリズムの要請に応える作品、また民族の歴史を正

統的に描く作品が求められた。とくに優先されたのは前者であるが、後進的とされたウズベク共和国の生活に学び「新しい人間」を描き出すことは難しかった。ウズベク作家同盟の幹部会員となったカーディリーはショーロホフの『開かれた処女地』を参考にフェルガナ地方の農村社会を『アビド・ケトメン』で描こうとしたが、主人公アビドはコルホーズに関心がなく、作者同様の宗教的人物であるとして非難された。他方、民族の過去を題材とした創作は、マルクス主義的な歴史発展観を援用して将来のソヴェト政権による民族解放への道筋を示しておけば比較的风险が少ないといえたが、これも例えば帝政期中央アジアを描けば現在のソ連体制下の民族抑圧を暗喩していると疑いをかけられかねなかった（1916年反乱を扱ったチヨルパンの小説『昼と夜』の『夜』は作者や関係者逮捕の契機となった）。

民族主義への警戒の高まりから、ソ連から越境する作家の文化的関心や人脈が危険視され、トルコ語とくにチャガタイ語の言語的優越を説いたフィトラトと交流のあった作家たちは攻撃対象となった。在地のロシア人作家に対する大国ショーヴィニズム批判も30年代半ばまで展開されたが、もっとも危険視されるのは非ロシア人の民族主義となり、ウズベク作家同盟内でも仲間内の中にいる敵への警戒心という主題を持つ劇作品が時宜を得ているとして評価されるようになった。大テロルにおいては作家たちが「革命世代」の民族知識人や彼らと交流の深かった人々の抑圧に直接加担することになり、民族文化の継承・発展に破壊的な結果をもたらした。

なお、過去の遺産に過度に賛美する「歴史主義」は当初隠れた民族主義として批判されがちであったが、民族の正統な歴史を描くことが求められウズベク民族文学の代表的人物として15世紀に活躍したナヴァイーを称揚する政策が明確になるとそうした批判はなされなくなった。階級敵の宗教的神秘主義者というナヴァイーの否定的評価は一変し、敵から祖国を防衛した英雄や文化的で賢く男性と平等の女性を描いた偉大な詩人として礼賛された。連邦レベルでもウズベク文化の象徴的存在としてナヴァイーは大きく取り上げられるようになったが、基本的にアゼルバイジャンのニザーミー同様、連邦の統合に資する諸民族の友好を演出するために用いられた。ロシア人にナヴァイーが広く読まれることは期待されない一方で、ウズベク人にはプーシキンやゴーリキーを学ぶことが奨励された。

ウズベク共産党第一書記イクラモフはウズベク人作家たちがロシア人の作品を殆ど読んでいないことを批判し、米英独文学からの翻訳よりも先進ロシア文学から優先的に学ぶことを勧めたが、こうした主張は大戦前に一段階強められた。ウズベク共産党第一書記ユスポフは、ウズベク人作家はロシア文化と露語を習得しなければマルクス主義作家とは呼びがたい旨を述べ、モスクワに作品内容の相談を常に行っていくことを勧めた。ユスポフによれば、多民族の共和国から成るソ連邦においては全員が革命と文化の言語であるロシア語を習得する必要がある。連邦の文化的秩序においてもヨーロッパ・ロシアを中心とした中央集権制の性格が強められていった。

■コメンテーター：塩川伸明、野田岳人

10月13日（日）

●パネル：「ソヴィエト的公衆・公論・公共性—общественность 概念を手がかりに」（10:00-12:00）

趣旨： 本パネルは、18世紀末以降のロシア社会に流通し始めた общественность という言葉のソヴィエト的語法、ソヴィエト期におけるその含意とその変遷を一つの手がかりとしながら、ソヴィエト体制下の公衆・公論・公共性の領域に光を当てることを狙いとしている。強力な党＝国家権力が社会を統治するイメージで語られがちな同体制の

下で、党＝国家と一般市民の間であって時に両者を媒介する中間領域に着目し、両者の相互関係を再考する試みと言い換えることもできる。

3人の報告者は、担当するそれぞれの時期の関連テーマについてすでに重要な成果をあげてきた。本パネルで、浅岡善治氏は *общественность* のソヴィエト的語法が確立するネップ期を、中地美枝氏は後期スターリン時代を対象とする。今回、海外から招聘したもう一人の報告者アレクセイ・ユルチャク氏は、ポスト・スターリン期、特にブレジネフ期を生きた人々が公式の世界と私的領域の狭間で展開した様々な社会的活動を”the public of свои”の概念で捉えた話題作、Everything Was Forever, Until It Was No More: The Last Soviet Generation を発表しており、本パネルではそれを再考してもらおう。また、フルシチョフ期を中心に「公私」関係の多角的な考察を進めている河本和子氏にコメントをお願いした。

なお、本パネルは、科研プロジェクト「近現代ロシアにおける公衆／公論概念の系譜と市民の主体性 (agency)」(研究代表者：松井康浩)の成果の一部である。(松井康浩)

### ■趣旨説明：松井康浩

#### ■浅岡善治：「ネップと「ソヴェーツカヤ・オブシェストヴェンノスチ」(仮題)」

ネップによる転換の重要側面の一つは、内戦下において広範な活動領域を一手に引き受け肥大化した「国家」機能のしかるべき部分を、順次「社会」へと移管することであった。何よりそれは、国家の負担軽減と活動の効率化のための客観的要請であったが、同時に、革命の初発の展望である「国家から社会へ」の理念を、今後の中長期的な建設活動の中に位置付け、再生させようとする理念回帰の性格をも併せ持っていた。かくて「社会」の側におけるその対応物として、「ソヴェーツカヤ・オブシェストヴェンノスチ」なる概念が浮上する。それは、ソヴィエト体制を支える大衆の健全な社会性の発露として従来の国家的機能を順次引き受けるとともに、その活動性と創造性によって体制が直面する危急の課題に活路を与え、やがては、究極目標である共産主義の実現と「国家の死滅」にまで導いていくはずの、ソヴィエト社会における最も積極的な構成要素とみなされた。

おそらくここでの最大の問題は、当該期のソヴィエト社会が、体制側が希求するこの種の活動性を著しく欠いていたことであろう。内戦による破壊と損失も大きく影響していたとはいえ、既成事実化しつつあった一党制国家の厳格な政治統制も社会の活力を確実に減退させていた。さらに、ネップが新たに容認した経済面での自由は、体制的に必ずしも望ましくない社会的要素(ボリシェヴィキの用語で言えば「スチヒヤ」)をも活性化させることが予見され、追加的な政治的引き締め策が早々と講じられていた。すなわちボリシェヴィキは、一方では自らにとって望ましい社会的要素の創出・涵養に努め、他方では望ましくないその成長に警戒し、厳格な規制を維持(場合によっては強化)するという困難な課題に直面していたのである。

ネップのイデオログとして、この難題に正面から取り組んだのがブハーリンである。彼は、ネップの長期的展望の中に有機的に位置付けられた「ソヴェーツカヤ・オブシェストヴェンノスチ」論を展開する中で、国家機関や党組織との類似性が強い「既存の諸組織」の機能的限界を指摘し、西欧の市民(ブルジョア)社会の在り方をヒントに、新たな課題に対処し得る「新しい組織」を提唱した。そうした「新しい組織」の一つが、彼が草創期から深く関与した労働者・農民通信員(ラブセリコル)の運動である。これは、新聞・雑誌等を媒介としたアマチュアの投書運動であるが、メディア特有の柔軟な存在形態を十二分に活用しつつ、同時にそこでの党・国家の影響力を相対化して出版本

来の批判的機能を確保し、社会末端において大衆の文化性と活動性を育む健全な「公論」の形成・発展を志向するものであった。やがて出版活動の展開とともに同運動は急成長を遂げ、以後長らく「ソヴェーツカヤ・オブシェストヴェンノスチ」を代表する社会的勢力として言及され続けることになる。

本報告は、このユニークな社会運動の個別分析から、ネップ期の「ソヴェーツカヤ・オブシェストヴェンノスチ」をめぐる思想的・実践的状况にアプローチしようとする試みである。同運動は、体制の側からしても、社会の側からしても確かに「新しい」ものであり、ゆえに必ずしも指導者の目論見通りには進まなかったが、幾つかの注目すべき成果も生んだ。その展開の軌跡は、当該期のソヴィエト社会の重要な諸側面を切開するものである。また、こうした実践の帰結とその体制的総括は、ネップからスターリン体制へのさらなる転換の意義性についても重要な示唆を与えてくれるだろう。

#### ■中地美枝：“What was Obshchestvennost’ in the Time of Stalin? : The Case of the Postwar Soviet Medical Profession”

Historiographically the period of Stalin’s rule is often considered one lacking in obshchestvennost’. Tens of thousands of voluntary organizations (obshchestvennaia organizatsiia) existed in Imperial Russia, and the early Soviet period is also argued to be the golden age for such organizations. However, many disappeared as the result of state prohibition in the 1930s. In the late 1950s and 1960s, Khrushchev actively revived obshchestvennost’ to mobilize society outside of the governmental or party framework.

If obshchestvennost’ was not promoted during the time of Stalin, what happened to it? This paper attempts to trace this development of change in time of war and postwar. Importantly, the Great Patriotic War provided an opportunity for Soviet citizens to experience the spirit of voluntary activism, which could be identified with late 19th century obshchestvennost’. However, this development was cut short by postwar political tightening. My goal here is to find cases when people referred to obshchestvennost’ and analyze the meaning of this term by looking at the context in which it appeared. I pay special attention to the way obshchestvennost’ of this period is defined in terms of its relationship with the government and bureaucracy and the level of voluntariness.

The main material for analysis is the discourse of the medical profession, especially in its concerns regarding women’s medicine, during two periods, wartime and postwar. The period of war and early postwar years was the time when Soviet citizens demonstrated great activism in defending the nation and helping each other and expressed their opinions more freely than in the prewar period. I suggest that this was a time of flourishing obshchestvennost’. From 1947-8, the Stalinist state retrenched and repressed those who had misinterpreted the meaning of Soviet victory, and obshchestvennost’ was also silenced. However, I argue that the medical profession continued to speak in the great tradition of the “enlightened bureaucrats” and tried to push for reform, eventually successfully.

#### ■アレクセイ・ユルチャク：“The publics of *svoi* and the unexpected Soviet collapse: How support for a political system can undermine it”

During the period of late socialism (1960s-80s) a new unique form of sociality emerged and rose to dominance in Soviet society – the public of *svoi*

(svoi meaning “one of us” or “ours”). This form of sociality differed from such conventionally recognized forms of Soviet society as ideological organizations, professional kollektivny, informal artistic communities and dissident movements. It also did not fit the conventional division of Soviet society into private and public spheres or into the politics of support for and opposition to the state. A “public”, as defined by Michael Warner, is a social group that is self-organized not according to a shared social, ethnic, geographical or other identities, but according to a shared reaction to a public address. Publics exist “by virtue of being addressed” by a common discourse. The Soviet publics of svoi emerged in response to the ubiquitous public address directed at every Soviet citizen in the ideological language of the party – at the Komsomol meetings, during pledges of allegiance, in the form of ideological slogans etc. But in the late Soviet context such public addresses were no longer understood in the literal sense. While almost every Soviet citizen gave an affirmative answer to the party question, “Are you in favor (of the party policy)?”, the meaning of this positive answer was not equal to literal support for the Party. In form this answer indicated support for the party, but the meaning of this answer became open and unpredictable. It was in the process of answering the ideological addresses in this peculiar way, that the Soviet “public of svoi” was formed. The spread of the publics of svoi during the late Soviet period prepared conditions for the unexpected collapse of the Soviet system. What were the features of the public of svoi? Around what principles were they organized? What subjectivities, social relations and political positions became shaped within them? I will address these questions in my presentation, providing ethnographic examples and a theoretical discussion.

#### ■コメンテーター：河本和子

#### ●共通論題（2）：大会企画「歴史のなかのロマノフ朝再考」（13:30～16:30）

趣旨：今年2013年はミハイル・ロマノフが全国会議でツァーリに選出されてから400年目に当たる。それを記念してロシア国内では様々な催しが行われている。出版界もそれに倣い、多くのロマノフ朝に関する専門書や史料集、帝政時代に出た書籍、さらには初心者向けのものに至るまで実に多くの本が刊行されている。その中にはいままであまり研究対象とされてこなかったツァーリを含む個人の伝記や治世以外に、このロシア第二の王朝を誕生させることになった「動乱時代」やその前後を扱う研究や史料集もある。例えば、偉人伝シリーズだけでも、B.コズリャコフの『動乱時代の英雄たち』、И.クールキンの『ロマノフ朝』、K.コジューリンの『モロゾワ大貴族婦人』などが刊行されている。日本の「中近世ロシア諸法典研究会」も、「動乱時代」の重要な史料である聖三位一体セルゲイ修道院の高僧アヴラーミー・パーリィツィンの手になる『歴史』の解釈・翻訳を進めている。

では、このロマノフ朝400年の歴史をどのように研究すべきなのだろうか。すでにロシア史研究会ではツァーリ体制や社会のもつ問題点や課題について幾度か大会で論じ、雑誌でも取り上げてきた。そこでの成果は日本のロシア史研究の指針となった感さえある。16世紀のイヴァン4世、18世紀のピョートル1世、19世紀のアレクサンドル2世、そしてニコライ2世といったツァーリたちがその対象であった。その際、ツァーリたちの歴史学的研究に関する方法論について重要な提言もなされてきた。われわれはそうした研究や提言を踏まえて今回の企画を立てようと考えた。

とはいえ、最近の日本の研究は近年の欧米での研究に刺激を受けて新たな方法が模索

されてきているのも事実である。「記憶」による歴史学の構築もそのひとつである。その意味では、100年、200年、300年といった節目毎に、どのように王朝成立が祝われてきたのか、あるいは祝われなかったのか。そしてその理由は何か、などが考えられる。また、「人的結合関係」という方法論から、ツァーリと宮廷、ツァーリと社会の関係性、というのもテーマとなりうる。以上のような点をも視野に入れながら、今回の企画は、報告者個人の問題関心に沿ってツァーリとその治世、あるいはその当時の社会について考えてみようとするものである。(ロシア史研究会委員会)

#### ■趣旨説明：豊川浩一

##### ■土肥恒之：「皇太子アレクセイ事件—史学史を巡る若干の問題」

先年惜しくも亡くなった英国のヒューズ女史(Lindsey Hughes, 1949-2007)はピョートル大帝と彼の時代のロシアについての優れた研究者として知られていたが、遺著となったRomanovs. Ruling Russia 1613-1917(2008)のなかで、ロマノフ家の歴史を扱う際の論点について次の4点を挙げている。①ロマノフ家内部の関係(帝位継承や不和・疎外)、②王朝とロシア貴族とのあいだの相互作用、③ナロードに対する王朝の関係(農民的伝統の保持と近代化の推進との間にうまれる緊張、ナロードの良きツァーリ観)、そして④王朝の女性たちの政治的及び文化的役割である。④は男性中心の権力構造のなかで軽視されてきたとして彼女が一貫して追究してきた論点でもある。本書はロマノフ家についての最新の優れた概説で、示唆するところが少なくない。

さて報告で取り上げる「皇太子アレクセイ事件」は従来①のピョートル大帝の家族内部の問題とされてきたが、他の諸論点とも深く関連している。事件は一体誰によって具体的に究明されたのだろうか。その位置付けや評価に問題はないのだろうか。こうした点について問題提起をしているのがツァーリ政府における「インフォーマルな権力構造」を重視するBushkovitch(1997, 2001)である。事件は親子間の問題である以上に、特に名門貴族と絡み合っており、また対外的な関連も欠かせないというのが彼の基本的な主張である。本報告は皇太子事件についての最初の本格的著作で、ブシュコーヴィチの鋭い批判を受けたУстрялов(1859)及びパヴレンコの新著Павленко(2008)の検討が中心になる。つまり史学史をめぐる幾つかの問題を取り上げることになるが、事件後に発布された新しい帝位継承法(1722)と同時代のハプスブルク家の「国事詔書」との比較も交えながら、出来るだけ幅ひろい視点で皇太子アレクセイ事件について考えてみたい。

##### 基本文献

Bushkovitch, P. Power and the Historian. The Case of Tsarevich Akeksei 1716-1718 and N.G. Ustrialov 1845-1859. — Proceedings of the American Philosophical Society. 141-2, 1997  
—— Peter the Great. The Struggle for Power, 1671-1725. Cambridge UP. 2001 ロシア語訳(2008)

Устрялов, Н.Г. История царствования императора Петра Великого. Т.6 СПб., 1859  
Павленко, Н.И. Царевич Алексей. ЖЗЛ. М., 2008

##### ■竹中浩：「アレクサンドル3世とその時代」

アレクサンドル3世の治世はこれまでそれほど高く評価されてこなかった。先帝のもとで進みかけていた政治改革を完全に停止させたという点で、政治制度に重きを置く人々、当時の自由主義的知識人や現代の歴史家にとって、アレクサンドル3世はあまり評判のいい君主ではない。彼の時代に、司法改革をはじめとする大改革の原則を修正しようとして行われた制度変更、いわゆる反改革も、その評価を下げている要因である。

また、この時代にナショナリズムの高まりが見られ、帝国統治においていわゆるロシア化が進められたことも、民族的な敵対や戦争を煽るものとしてナショナリズムを嫌う知識人や歴史家に、肯定的には捉えられていない。

しかし、いわゆるゼムスキー・ナチャーリク制度の導入やゼムストヴォ改革が、必ずしも地方行政の水準低下をもたらさず、逆に全体として行政的なパフォーマンス向上に役立った面があることは、かつて少なからぬ行政史家が指摘したところである。アレクサンドル3世の嫌った国民代表制や司法の独立をはじめとする権力分立という政治原則の、当時のロシアにとっての適合性の有無を判断することも、必ずしも容易な課題ではない。たしかにアレクサンドル3世はナショナリストであった。しかし彼の治世は、当時の国際的緊張にも拘わらず、近代ロシア史においては例外的に、戦争のない時代であった。

アレクサンドル3世は、卓越した知性の持ち主ではなかったが、バランスのとれた常識家であり、実務的な判断力に優れ、また人間的な魅力をもっていた。皇太子時代に、オスマン帝国との戦争において主戦派であった彼が、時代の気分流されて戦争を行うことの危険を学び、即位後は安易に戦争という手段を選ばず、親独路線のギールスを一貫して外相のポストにとどめた点はこの時代の外交を考える上で重要であるし、目覚ましい経済成長を起動させたヴィッテを登用したのがこの皇帝であることも、忘れてはならない事実である。ヴィッテのアレクサンドル3世に対する高い評価は、あながち自分を信任してくれた人への単なる謝辞（及び自分を排除した人へのあてつけ）とばかりは言えない。君主の資質や態度で個々の事件を説明することはとうに廃れた歴史叙述の方法であるが、この時代を、君主としてのアレクサンドル3世の資質や態度と切り離して論じることまた、困難であるように思われる。

アレクサンドル3世時代に対する評価は、ロシア近代史に対する評価と深く関わっている。社会主義国の体制移行に先立って、1980年代、かつて権威主義とか開発独裁とか呼ばれていた政治体制をもつ国が相次いで民主化した。これらの国について、権威主義体制下の政治的安定のもとで、経済の成長と行政的・社会的な制度構築が進み、それによって民主化の条件が熟していったという側面を、全面的に否定することは難しい。民主化の前提となる制度インフラの整備と成熟には時間がかかる。近代ロシアにおいて、それが可能な時代を探すとすれば、体制を動揺させる危険な戦争がなく、政治的に安定していたアレクサンドル3世の時代こそが候補に挙げられるべきであろう。もちろんこれはそのような歴史の道が実現可能であったということではない。ロシア近代史の議論に幅を与えるためにも、それが実現しなかったのはなぜかという設問の可能性を、否定しないほうがいだろうということである。

#### ■巽由樹子：「18-19世紀ロシアの戴冠式アルバム―ツァーリ表象と出版の関係についての考察―」

王権はしばしば人々の意識の中で、彼らが帰属する世界の秩序を統合し、安定化することのできる権威として位置づけられる。こうした、いわゆる王権とコスモロジーの問題は、ロシア史では正教徒のツァーリ信仰や、ムスリム臣民と皇帝との関係についての諸研究によって論じられてきた。そして、王がそのような超越的な権威を獲得し、支配者としての正統性を認められるとされる局面の一つが、即位儀礼である。ロマノフ朝のツァーリたちが、そうした即位儀礼をいかなる戦略で表象したかについても、近年、重要な研究が現れている。しかし、即位儀礼が執り行われたからといって、王権の権威が臣民に等しく周知され、ただちに社会で共有されるわけではない。即位儀礼におけるツァーリの姿がいかなる範囲の人々に伝達され、どのように受容されたかは、時代に応じて異なると想定されるのであり、その変化を検証することもまた、ロシアにおける王

権とコスモロジーの問題を考える手がかりとなるだろう。

本報告は以上のような問題意識のもと、ツァーリの即位儀礼の伝達状況の変化を、18-19世紀ロシアの戴冠式アルバムを題材とすることによって考察する。エカチェリーナ1世からニコライ2世まで、ロマノフ朝の歴代皇帝の戴冠式後には、式次第をテキストと挿画とで綴る公式アルバムが刊行され、ツァーリの即位儀礼について周知する手段の一つとなった。こうした戴冠式アルバムは、俗体活字が制定され、世俗本の印刷刊行が本格化して間もない18世紀前半と、輪転式印刷機が普及し、廉価な書物が大量に流通した19世紀後半とでは、ロシア出版界における位置づけが大きく変化し、社会に対する発信力も相当に異なると考えられる。本報告では、先行する諸研究に依拠しながら、18-19世紀ロシアの戴冠式アルバムが、いかなるネットワークの中で制作された出版物だったかを明らかにする。その上で、特にニコライ二世の戴冠式アルバムについて、宮内官僚、美術アカデミー、商業出版社が関与した編集過程を分析し、前代までと比較しながら、最後のツァーリの即位儀礼の伝達状況にどのような特色があったかを考察する。

■コメンテーター：池本今日子、池田嘉郎

\*\*\*\*\*

### 【ロシア史研 五月例会】

ロシア史研究会五月例会について

斎藤祥平（北海道大学文学研究科博士後期課程）

2013年5月18日、早稲田大学においてロシア史研究会の例会が開催され、昨年出版された麻田雅文氏の『中東鉄道経営史-ロシアと「満州」1896-1935』（名古屋大学出版会）の合評会が行われた。本書のもとになった博士論文は第10回「アジア太平洋研究賞」（井植記念賞）を受賞している。合評会の全体の流れは次のようなものである。まず評者として富田武氏と左近幸村氏が報告を行い、その後、麻田氏によるリプライを経てフロアとの議論が活発に行われた。

左近氏は本書が中東鉄道の歴史を体系的に俯瞰した世界でも初の研究だとして評価した上で、多岐にわたる指摘や質問を提示した。なかでも、左近氏は、帝国主義論と植民地近代化論という先行研究の二つの潮流を批判し、史料による脱構築を狙った本書が、結果として前者の伝統を踏襲し、帝国主義批判に陥っているという、先行研究の扱い方と問題設定に関わる議論を行った。（なお、左近氏は『西洋史学』にて本書の書評を発表予定であるとのことなので、詳しくはそちらを参照されたい。）富田氏は政治史の観点から、本書が当時の国際関係を考慮に入れつつも、「経済主義的」分析が見られることを指摘した。特に、ソ連による中東鉄道の満州への売却をめぐる外交官レフ・カラハンの位置づけについて、カラハンが強調した中東鉄道の経営悪化だけでなく、軍事戦略的な観点からも説明が可能ではないかという指摘、またカラハンが売却論者であったのかについて、さらなる史料的論証が行われる必要性の指摘がなされた。また、両評者に共通して、中東鉄道理事会等の内部の議論を詳細に検討することが提案され、これは麻田氏のリプライとフロアからの指摘によってさらに議論が深められた。

これらの講評に対し麻田氏は、先行研究の系譜について触れ、帝国主義批判を経て、ソ連崩壊後に植民地近代化論が展開されたことから、その後続く本書が帝国主義批判に回帰しているように見えるが、中東鉄道が単に利潤を挙げるべき存在ではなく、領域支配の道具であり、地政学的な優位の確保を狙った「植民地化会社」であったというのが本書の立場であることを述べた。カラハンについては、彼が実務的であり、対日戦を避けるため

に売却を行ったという側面、孤立無援で売却に反対することは難しかったという当時カラハンが置かれていた状況について補足説明がなされた。中東鉄道内の理事会の位置づけについては、理事会における中ソの人数が同数で、最終的にソ連の意向が反映されがちであったことや、中国人への日本の影響力といった問題点が紹介された。

フロアからは、中東鉄道が全体として「植民地化会社」というシステムから分析可能だとしても、ロシアにとっての中東鉄道の意義は、侵略意図だけではなく、経済的なメリットも大きかったという指摘、本書で中東鉄道の無償返還を主張したとして紹介されるトロツキーについて、ソ連の反帝国主義のイデオロギーやトロツキーの影響力の低さから過大評価ではないかという指摘、中東鉄道内で理事会の上部に位置づけられ、ソ連の影響力が大きかった管理局について考察を深めるべきとの指摘など、専門性の高いコメントが多く寄せられた。一方、麻田氏のリプライには、時期による状況の変化等、本書の時間軸の長さが生かされていた。

当日の参加者は20名を超え、議論は白熱した。本書が帝政期とソ連期の両方を扱い、さらにはロシアと東北アジアの関係を解明することを目指していることから、多くの会員からの関心を集め、指摘や質問がなされたが、それらは、麻田氏の跨境的な近現代史への視座が、膨大な史料の読み込みに裏付けられているものであるという高い評価を伴うものであった。



(麻田書評会の会場の様子 撮影：小森宏美)

## 【ロシア史研 六月第一例会】

6月1日(土)午後3時より、東京大学法文1号館にて、ロシア史研究会六月第一例会が開催された。東京工業大学早坂真理氏の協力のもと、ベラルーシ出身の歴史家アレクサンドル・スマリヤンチュク氏をお招きし、「20世紀のベラルーシ国民思想：『ナーシャ・ニーヴァ』からルカシェンコまで」と題した報告をしていただいた。報告者は、現在、ポーランド科学アカデミー・スラヴ学研究所教授で、近現代のベラルーシやポーランドのナショナリズムについて多数の著作を発表しておられる、気鋭の歴史家である。



(スマリヤンチュク氏と早坂氏 撮影：青島陽子)

報告者によれば、ベラルーシは20世紀末まで独自の国家を持たなかったため、中東欧型の諸民族のなかでも独自性をもつという。こうした前提のもと、報告では、19世紀の前史、および、20世紀から21世紀のベラルーシ国民思想の形成と変容に光が当てられた。ベラル

一シは、民族を区分する地理的・民族的・文化的に明確な指標を持たないものの、当該地域には多様な独自の地域アイデンティティが形成され、それらが時代ごとの歴史的環境に影響されながらダイナミックに発展した。報告ではこうした経緯について、多数のスライドを用いながら丁寧に解説していただいた。

フロアからは、リトアニア大公国時代の歴史環境、革命期の政治運動との関連、スラヴ主義との関連、ベラルーシの地域主義の特性など、専門性の高い多様な質問が出され、議論は大いに白熱した。報告者は、国民国家としての歴史が浅く、他国の歴史と複雑なかたちで交錯するベラルーシの歴史を論じるとき、「記憶の歴史」が重要となると指摘する。2011年春からオン・ラインで進められているプロジェクト「ベラルーシ・オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」(20世紀のバイオグラフィカル・インタビュー集)についても紹介があった。報告者の「対話が大切なのだ」という言葉が心に残る(文責 青島)。

### 【ロシア史研 六月第二例会】

ロシア史研究会 6月第二例会参加記 ～土屋好古著『「帝国」の黄昏、未完の「国民」一日露戦争・第一次革命とロシアの社会』合評会～

中谷昌弘(新潟大学他(非))

去る2013年6月22日(土)、早稲田大学において、土屋好古氏[以下、著者]の『「帝国」の黄昏、未完の「国民」一日露戦争・第一次革命とロシアの社会』(成文社、2012年)[以下、本書]の合評会が開催された。

合評会は、評者である根村亮氏(新潟工科大学)のユーモアを交えた報告で幕を開けた。根村氏は、著者のこれまでの業績(労働運動史)をふまえながら、本書が「スケールの大きな」ものであり、「国民意識という領域への挑戦」を行っている点に意義があると評した。一方問題点としては、本書では1905年革命以降に関して、例えば一般国民の問題が初めて議論されるようになった第三国会の問題などが取り上げられていない点(「本書も未完か?」)、さらにはロシアではポグロムやフリガーストヴォといった問題の背景には必ずといっていいほどアルコールがからんでいることから、第五章の予備役兵をめぐる諸問題では「アルコール問題」についてもう少し突っ込んだ議論がなされてもよかったのではないか、といった点などが指摘された。

続いて行われた評者池田嘉郎氏(東京大学)の報告では、まず総評として、「ネイション・ビルディングという新しい観点」から日露戦争や1905年革命、さらには20世紀初頭におけるロシア帝国の諸問題に切り込んでいる点、また「日露戦争の動員の事態に関しても新しい事実が豊富である」点、さらには「日本においてながらく研究史の薄かった1905年革命について一気に研究の水準を引き上げ、かつ世界的に見ても独創的な議論を(日本のモデル化について)打ち出している」点などにおいて、本書が非常に「完成度が高い」ものであると評した。その後各章ごとに詳細な論評が行われ、最後に問題点・批判点として以下の3点:①帝国やネイションという概念を扱う上で、宇山智彦氏や長縄宣博氏といった「非ロシア地域を分析対象にした研究者」の業績が参照されていない点、②1905年革命時にリベラル派と対峙していた内務省および専制政府のあいだで「どのような積極的な社会統合構想があったのか」についての議論が薄い点(これと関連して草野佳矢子氏の業績が参照されていない点)、③「リベラルによる公民的ネイション形成の戦略」における「帝国性」の問題について、例えば彼らがポーランドやフィンランドをどのように扱おうとしていたのか(疑問点)、があげられた。

この後休憩をはさんで、著者による前2報告に対する応答があり、さらには出席者を含めたフロア全体での質疑応答が行われた。本会で行われた議論をここで詳細に述べることはできないが、概して以下の2点:①第一次世界大戦—ロシア革命との比較、②自由主義者にとっての「国民(ネイション)形成」とは何か、に議論が集中していたように思われ

る。①に関していえば、銃後社会や予備役兵召集の問題を中心に議論が展開され、その後第二次世界大戦にも話題は及んでいった。また②では、例えば自由主義者たちが農民をどのような形で「国民（ネイション）」に取り込もうとしていたのか（あるいは避けようとしていたのではないかなど）の疑問点が出された。これに対して筆者からは、他の身分と農民身分との平等化を図ることなどで、多くの自由主義者が農民をかなり積極的に「国民（ネイション）」に取り込もうと考えていたとの返答を得た。

以上の他にも、様々な議論が活発に行われ、全体として非常に充実した（新潟から来た甲斐があった）例会であった。



（土屋書評会の会場の様子 撮影：小森宏美）

## 土屋好古著『帝国』の黄昏、未完の「国民」、書評会参加記

麻田雅文（国文学研究資料館）

日露戦争は対戦国のロシアに、どのような社会的・政治的な影響を及ぼしたのか。その一端を明かす、土屋好古著『帝国』の黄昏、未完の「国民」——日露戦争・第一次革命とロシアの社会』（成文社、2012年）の書評例会が、6月22日土曜日、早稲田大学で開催された。著者の土屋会員を招き、評者の根村亮会員、池田嘉郎会員、さらに20名近い聴衆も加わり、3時間余りの重厚な議論が展開された。

まず根村会員は、本書が内容的にも広がりのある上に、一般読者にも関心がもたれ、かつ専門書としても高度な内容である、と高く評価した。また昨今の一次史料重視の風潮に対し、一次史料を用いてはいるもののそれを前面に押し出すことなく、公刊史料を活用してこのような大著を書き上げたのを称讃した。方法論的な面では、アナル学派の洗礼を受けた同世代として、戦時中に政府が国策としてナショナリズムを創出する過程を描く、という安易な道を選ばずに、民間レベルで戦争をどのように捉えていたのか、という民衆の雰囲気をとらえようとした研究、と本書を位置づけた。

本書の問題点としては、第一に、本書が依拠した帝国論について、比較例となる数が少ない「帝国」の類型化から得られる知見を取り込むよりも、ロシア帝国の固有性に焦点を絞った方が、無難だったような気がしないでもない、とした。第二に、第一次ロシア革命を論じるならばストルイピン期にまで踏み込むべきであったとして、本書もまた未完なのか、という題名に絡めた質問がなされた。三点目は、ナショナリズムや国民意識を論じるならば、ロシア帝国を支えた教会についても議論があって然るべきではなかったか、という指摘がなされた。第四に、本書で用いられている帝政期の「リベラリズム」についても、一言では要約できないその思想的多様性について補足があり、その代表的な人物として本

書で取り上げられているピョートル・ストルーヴェ（Петр Бернгардович Струве）については、彼の文化的ナショナリズムの思想は大衆性を獲得し得なかった、という見解を示した。最後に、ユダヤ人と予備役召集の問題の絡んだ本書の記述については、ユダヤ人の兵役逃れが多かったと言っても、ロシア帝国全体の徴兵逃れの機運に影響を及ぼしたという記述には違和感を覚える、という指摘もなされた。また配給酒なしで軍を統括できなかったロシア軍についても、根村会員自身の研究にも関連させて、ロシア軍の弱点として論じられた。

もう一人の評者である池田会員は、リベラリズムと並ぶ本書のもう一つのテーマ、ネイション・ビルディングに関心を寄せ、この新しい視点から日露戦争と第一次ロシア革命を論じた本書を高く評価した。池田会員によれば、ヨーロッパ・システムに包摂されていたロシアは、その外にあった日本と比較すると、西ヨーロッパへキャッチ・アップするための改革への危機感が戦前には薄かったという。本書の記述によれば、対戦国日本との対比の中で「国民(ネイション)」（Нация）という概念が中心的な問題となり、日露戦争中に自由主義思想家たちの議論が練り上げられる。ロシアの自由主義者たちが日本を過大評価した、という指摘がこの本の価値を高めている、と池田会員は指摘した。そして本書は、ロシアにおけるネイションの不在という自由主義者の問題意識から、ネイション・ビルディングという普遍的な論点に展開して日露両帝国を比較することで、「日本史もロシア史も新しい目で見ること」を可能にし、研究の乏しかった「05年革命」の研究水準を引き揚げ、単著として完成度が高い、という賛辞が送られた。また動員の規定、その実施の詳細についての研究がない中で、その詳細を明らかにし、赤十字の公刊史料などを活用して、劣悪な輸送環境を経て、日本軍と対峙した時にはすでに疲弊していたロシア兵の実態などを明らかにする等、本書は戦争の社会史を議論する足掛かりを築いた、と高く評価した。最後に、日露戦争は第一次大戦の総稽古である、と池田会員は位置づけた上で、総力戦の問題の端緒は見えるが、日露戦争を第0次世界大戦と位置づける昨今の議論に疑義を呈した。

一方、問題点としては、日本におけるロシア帝国論の先行研究への言及が十分ではなく、保守的であった内務省も社会との連帯を考えていたことが指摘された。またロシア人が中心となるネイション・ビルディングという自由主義者の構想の裏で、疎外された民族（フィンランド、ポーランドなど）が革命のさなか民族運動を高揚させてゆく、という本書の指摘には賛同が示されたが、フィンランドやポーランドを自治制にする、というカデットの主張に代表されるネイション・ビルディングの構築論には、そもそも「帝国」が影を投げかけていたのではないかと指摘した。また「05年革命」はどのような観点から見て「革命」なのか、「第一次ロシア革命」という名称は、進歩主義的な「革命の系譜学」が無意識に継承されてきたがゆえの命名ではないのか、といった先鋭的な質問も投げかけられた。

上記に対し土屋会員は、帝政ロシアの終わりは第一次ロシア革命から始まっているというのが共通理解だろう、とした上で、血の日曜日事件（05年1月）から第二国会の解散（07年1月）までが第一次革命と捉えられてきたが、実際は04年7月のプレーヴェ内相暗殺から、06年4月の国家基本法制定で革命のプロセスが終焉した、という見解を示し、ロシアでは国会と憲法を擁する立憲体制が06年から17年まで続いたとして、その前で区切りをつけた本書の締めくくり方について妥当性を主張した。またストルーヴェの意見が広く共有されていたわけではないが、穏健な自由主義者の間では、国民代表制というアイデアに通底するものがあつた、と反論した。ついで、第一次ロシア革命の騒擾の一因には、強引に徴兵されていた予備役が不満をくすぶらせていたことにある、という本書を特徴づける見解も示された。宗教については、戦争の遂行や戦時中のナショナリズムと教会がどのように関わっていたのかは他の研究者に譲りたい、とした。ポーランドとフィンランドをどう見るのか、という質問に対しては、池田会員の指摘するように、自由主義者の中では例外的な存在として扱われていたことに同意した。その上で、これらの地域を帝国全体にどう関連付けるつもりだったのかは、憲政下の次の時代を論じる際に問題となるだろう、と今後の課題とした。さらに、用語としての「第一次ロシア革命」については、「革命」と

という言葉は当時から使われていたと前置きしたうえで、メンシュヴィキは「20世紀初めの社会運動」として当時を総括した論文集を刊行した事例をあげ、必ずしも現行の第一次ロシア革命という名称にこだわる必要はなく、立憲革命が適当ではないか、として、評者への返答が締めくくられた。この後も、会場からはロシアの自由主義思想、ポーランドやフィンランド問題、ロシア社会と飲酒などをめぐって、興味深い質疑応答が交わされた。

例会を通じて、筆者（麻田）にとって最も興味深かったのは、ロシア帝国と大日本帝国という、異質な二つの帝国の、戦時における様々な様相の比較的論点である。なぜ、ロシア帝国は開戦当初に総力戦体制の構築に失敗したのか。そして日本は、銃後も含めてなぜ戦時体制に素早く順応できたのか。土屋会員はこの点につき、まず日本とロシアが同じような政策を施したが、それを受け止める「草の根のネットワーク」が異なるので結果も異なった、という相違点に言及した。また日本は「日露戦争の総稽古」として日清戦争（1894-95年）を10年前に戦っていたことが大きい、というのも、動員や出征など、日本の戦時体制構築を促したのがこの戦争だった、という興味深い指摘を行った。片やロシア帝国が直面した戦争は、1878年の露土戦争まで遡る。例外的に、1900年の義和団戦争に動員されたばかりの極東の諸部隊のみは戦時体制に素早く移行できた、という本書での指摘も、それを裏付けるだろう。

いわゆる帝国論が隆盛だった中でも、ロシア帝国と大日本帝国という、二つの帝国を比較した論考はあまり見かけなかったが、本書が示すように、日露戦争はその好個の材料として、ロシア史研究者がより深く検討する価値があったのではないか。日露戦争終結100周年から8年経った現在、研究の関心は勃発100周年を翌年に控えた第一次世界大戦（1914-1918年）に向けられつつあるが、こうした日露戦争の研究の諸成果と残された課題をどのように応用してゆくのかは、日本の研究者の課題であろう。

根村会員は、本書は長らく労働運動史を専門としてきた土屋会員が、本格的な労働運動研究に戻る前のウォーミングアップだ、と推察した。土屋会員は本書の「あとがき」にあるように、労働運動の研究をまとめようとする最中に日露戦争の研究に関わるようになった経緯を例会でも述べ、本書を執筆したことで労働運動の研究そのものへの見方が変わった、と内面の変化を述べられていた。遠からず、例会での様々な論点の答えとなる研究成果も、満を持して提示されるであろう。期待して攔筆したい。

## 【ロシア史研 八月例会】

8月7日、東京大学本郷キャンパスで8月例会がウクライナ研究会との共催で行なわれた。報告者にはアンドリー・クラフチュク氏（サドバリー大学、カナダ）とトーマス・ブレマー氏（ミュンスター大学、ドイツ）をお招きした。二人とも ICCEES 執行委員として来日中で、この機会を利用して日本の研究者との交流を希望されたのである。報告は、お二人それぞれが編集集中の、ICCEES スtockホルム大会のペーパーから選定した論文集の内容についてのもので、クラフチュク氏が東方正教会の過去と現在について、ブレマー氏がロシアにおける宗教アイデンティティについて、編集集中である。当日、二人はペーパーを読むのではなく、まず出席者から質問を募りたいと呼びかけられた。それへの返答をまじえながら、本の紹介や、宗教関連の研究上の諸問題についてさらに触れるという、ディスカッション形式で例会は進んだ。会場からは、ポーランド・ウクライナ関係における宗教の役割、現在のウクライナの民主化への正教会の関与、1920年代の正教会刷新運動の今日の評価、正教会が（ドイツのキリスト教民主同盟のように）政党をつくらない背景など、多岐にわたる質問や論点が出され、議論は終始活発に進んだ。ウクライナ研究会から多くの会員が参加され、ロシア史研究会にとっても大いに刺激を与えられた。今後も両会で共催の機会を探り、2015年のICCEES幕張大会につなげていきたい（文責 池田）。

\*\*\*\*\*

## 【ロシア史研究会委員会より】

### ＜ロシア史研究会大会に関して＞

返信用のはがきを同封しています。大会当日に配布する報告者のレジュメの準備と、懇親会の準備のために、出席者の概数を把握する必要がありますので、出欠のご予定をお知らせください。欠席される方については、上記の総会での委任の意思確認を兼ねています。事務局では、9月末までに出席予定者数を把握する必要がありますので、期日が迫っており申し訳ありませんが、**9月25日までに投函して下さい。**

大会プログラムとその他の大会に関する情報は、ロシア史研究会のホームページ ([http://www.gakkai.ac/russian\\_history/](http://www.gakkai.ac/russian_history/)) に掲載しています。共通論題・自由論題・パネルの報告者のフルペーパーをこのホームページからダウンロードできます。ダウンロードしたファイルを開けるさいにパスワードをご入力ください。パスワードは「**1613**」です。上記のホームページにおいて、大会に関する新着の情報、プログラム等の修正・訂正、報告ペーパーの更新を随時行いますので、適宜ご参照ください。

今年も、両日ともに事務局では弁当などの昼食の手配を行いません。各自でご用意下さいませよう、お願いいたします。

### ＜雑誌『ロシア史研究』編集部より＞

『ロシア史研究』94号の投稿締め切りは、2013年12月8日（日）です。投稿をお待ちしています。

投稿ご希望の方は、事前に編集部土屋宛 ([ytsuchy\(at\)chs.nihon-u.ac.jp](mailto:ytsuchy(at)chs.nihon-u.ac.jp)) にご一報くださると助かります。

### ＜新会員の紹介＞

2013年4月～8月の新入会員（1名）をお知らせします。

松寄 英也（2013年6月3日入会）

所属：上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科、日本学術振興会特別研究員  
専攻：東欧政治、旧ソ連の民族問題、モルドヴァの沿ドニエストル地域を中心とした分離独立問題

### ＜9月例会について＞

89号のNLでお知らせしました高橋沙奈美さんの報告（9月例会）は、都合により延期になりました。

-----  
ロシア史研ニューズレター  
第90.91号 2013年9月10日発行  
編集・発行 ロシア史研究会委員会  
（担当：青島陽子）

Address: 〒113-0033  
東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学文学部西洋史学研究室気付  
ロシア史研究会事務局  
-----